

40	学校法人 立花学園 立花高等学校	全日制	普通科	H29
----	------------------	-----	-----	-----

## 平成 29 年度 高等学校における特別支援教育推進のための拠点校事業 実施報告書（成果報告書）（要約）

### 1 研究開発課題

基礎学力の補充は後の社会生活での自立に向けて絶対に必要な要素であり、特に義務教育段階で学習経験の乏しい本校の生徒たちにとっては、小さな達成感を味わわせることで次の意欲を喚起する学習支援が絶対不可欠である。そこで『「よし、やろう！」「やった、できた！」と思える学習支援のありかた』をテーマとして掲げ、幅広い生徒のニーズにこたえる日常指導のあり方を研究するものである。

### 2 研究の概要

学習進度別授業、学習支援、体験型学習、学校外教室、サポート学級、先進校視察、コミュニケーションツールとしてのゲーム機の活用、全生徒へのタブレット端末の導入などの各種取り組みを実践した。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究開始時の現状分析と研究の目的

本校の生徒の多くは不登校経験者であり、また自信が持てず自己肯定感が低い傾向にある。学習面では、それぞれの特性から定着に時間を要するため、学習意欲が低下したり、集団が苦手であるがゆえに安心して学習の場に行くことができなかつたり、学校や教員の支援意識の向上と支援体制の構築が急務と考えられる。そこで、多様な学習支援から、生徒の自己肯定感の増加を経て自己実現への意欲向上に繋げることを目的とする。

#### (2) 研究仮説

生徒各々の現状に応じた「できる手段」を幅広く提供することで、生徒は達成感を味わい、それが次の目標、ひいては自己実現へ向けての意欲に直結するのではないか。

#### (3) 必要となる教育課程の特例

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
① 学習進度別授業 (国語・数学・英語)	① 1年生は初級・中級・上級の3クラスに分ける。また2, 3年生はデュアルシステムコースの生徒を4クラスに分けて授業を実施する。	① 各教科によるものとする。

<p>② 学習支援</p> <p>③ 体験型学習 (2、3年生のデュアルシステムコースの生徒)</p> <p>④ 学校外教室</p> <p>⑤ サポート学級</p>	<p>② 学習支援室への抜き出し形態で、独自の教材を用いた日常生活に必要程度の内容</p> <p>③ 体験型の学習として具体的に活動を行う。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・調理販売実習</li> <li>・農業体験学習</li> <li>・広告デザイン</li> <li>・パソコン実技</li> <li>・命のつながり方</li> <li>・ワークトレーニング</li> <li>・サロン</li> <li>・グリーンコープ</li> <li>・ミシン</li> <li>・手芸</li> </ul> <p style="text-align: center;">以上10コース</p> <p>④ 登校が困難な生徒のために学校外にて教科の授業を行う。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・粕屋教室（火曜日）</li> <li>・西教室（火曜日）</li> <li>・古賀教室（木曜日）</li> <li>・白木原教室（木曜日）</li> <li>・本校（水曜日）</li> </ul> <p>⑤ 主に同級生や大人数の環境が苦手な通常学級入室が困難な生徒の通級支援として、別室の教室を設置する。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・複数担任制</li> <li>・1～3年生の混合縦割り少人数学級</li> <li>・移動教室を極力なしとする</li> <li>・より興味関心を持ちやすくした抵抗の低い学習内容</li> <li>・休日に安心して家族と参加できる「家族参加教室」の導入</li> </ul> </p> </p></p>	<p>② 母体となる所属クラスと同等のものとする。</p> <p>③ 毎週金曜日の午前中4時間を年間実施し、前期・後期でそれぞれ2単位の取得とする。</p> <p>④ 毎週17:30～19:00の2時間実施し、正規の授業の出席として認める。</p> <p>⑤ 所属学年に応じた正規の授業の出席として認める。</p>
--	---	---

#### (4) 研究成果の評価方法

- ① 生徒に対するアンケートの実施
  - ② 生徒の授業出席率
- 以上二つをみて総合的に評価する。

### 4 研究の経過等

#### (1) 取組の内容

- ① 国語、数学、英語の授業は学習進度に分けて授業を実施する
- ② 母体となる所属学級や進度別初級クラスにおいて特に国語、数学、英語においてはどうしても一斉授業に追従することが難しい生徒たちを別室に抜き出して、独自の教材を用いて学習する
- ③ 体験型の学習を充実させ、様々な技能の習得を図る
- ④ 登校が困難な生徒のための、学校外での授業受講を出席数とみなす
- ⑤ サポート学級における授業を、所属学年に応じた正規の授業として認める
- ⑥ 先進校視察
- ⑦ コミュニケーションツールとしてのゲーム機の活用
- ⑧ 全生徒へのタブレット端末の導入

#### (2) 評価に関する取組

- ① 平成29年9月に1年生に対し、前期学校満足度アンケートを実施し、満足度を把握した。
- ② 教職員全体に対し、生徒の授業理解度及び授業参加率についての意識調査を実施した。
- ③ 平成30年3月に1年生に対し、後期学校満足度アンケートを実施し、満足度を把握した。

### 5 研究開発の成果

#### (1) 実施による効果

今回の成果を評価するうえで参考となるアンケート結果を以下に示す。

平成29年度 前期1年生学校満足度アンケート

○授業はわかりやすいですか？

わかりやすい	65パーセント
わかりにくい	6パーセント
どちらでもない	29パーセント

平成29年度 後期1年生学校満足度アンケート

○授業はわかりやすいですか？

わかりやすい	57パーセント
わかりにくい	3パーセント
どちらでもない	40パーセント

これは1学年で実施した学校満足度アンケートの中の項目の一つとして授業のわかりやすさを問うたものである。

前期と後期を比べると授業がわかりにくいと答えた生徒の割合が6パーセントから3パーセントに減っており、学習進度別授業や学習支援体制の実施により授業理解の底上げの効果ができていると捉えることもできる。

しかし、わかりやすいと答えた生徒は65パーセントから57パーセントに減っており、どちらでもないと答えた生徒も29パーセントから40パーセントと大幅に増える結果となった。この結果から底上げに成功はしたものの、より全体的にわかりやすい授業を展開していかなければならないという課題も見えてきた。

今回の取り組みを通じて得られた大まかな感触として様々な生徒層へ対応するための多くの取り組みを講じることにより、生徒の「よし、やろう!」「やった、できた!」という成功体験や自己有用感の構築に一役を買ったと思われる。

その根拠として、例年に比べて生徒の出席率の上昇（中抜け生徒の減少）や授業をするうえで感じられる学習意欲の向上などがあげられる。これにはなにより学習進度別授業の取り組みによって多くの生徒が自分の学習進度にあった授業を受講することができたこと、特に初級クラスにおいてはチームティーチングや学習支援員として加配した教職員の手厚い学習支援体制のもと、授業から取り残されてしまうことやそれに伴い二次的に生じる学習意欲の低下や自己否定感の増加リスクを低減させることに成功した結果であると考えることが出来る。

学習支援に関しては国語、数学、英語の初級クラスはもとより教員2人のチームティーチング体制を取っており、そこに学習支援員の教職員を加え3人体制とすることで、分厚い支援体制での授業を遂行することが出来た。

また、体験型授業の実施により、通常の教科教育では得ることが出来ない体験や実践的技能を身に着けるきっかけを作ることが出来た。10コースそれぞれ外部講師の導入による先進的取り組みはもとより、全コースを通して言えることとして大勢がひとつの目的を遂行のために協議し協力する経験を得られることそのものが生徒の人間性の構築や対人関係の技能を磨くことに大きく貢献したといえることができる。

また学校外教室の利用者は本校にて実施される水曜教室を含めた全5つの教室で通常時一週間に計15名ほどが利用しており、本校の長期欠席生徒以外にも不登校に悩む地域の中학생やその保護者の相談の場としても活用されている。

サポート学級に関する取り組みは本校が以前から取り組んでいたものであるが、家族参加教室の実施により、生徒は保護者や兄弟姉妹などと一緒に授業を受けることが可能となり、これまで家族以外になかなか心を開くことが出来なかった生徒も安心感を得ながら学校の授業を受けることが出来た。これは長らく学校から遠のいてしまっている生徒などにも登校のきっかけづくりとして大きな役割を果たした。

コミュニケーションツールとしてのゲーム機器導入にあたっては、ゲーム内容はお互いが協力関係を築くことで目的を達成できる内容のものを選定し、単純な対戦ゲームは避けるように配慮した結果、実際にコミュニケーションに困難を抱え、友人づくりに心を苦しめていた生徒が、ゲームをきっかけに友人関係を持つようになって周囲へ打ち解けたり、他学年の生徒のつながりを構築するきっかけとなったりと大きな役割を果たした。

タブレット端末の導入に関する評価として、導入にあたって先に述べたペーパーレス化のメリットや書字障害に関するメリットを実際に感じる事ができた。ただし生徒の家庭に経済的負担が増えることとそれに見合うメリットとしての学習効果が上げられたのかは課題が残る結果といえる。今後は教員側のより積極的な取り組みや経験の蓄積、工夫に効果を最大化していく必要がある。

## (2) 実施上の問題点と今後の課題

今年度は多くの取り組みで大きな成果を残すことができたが、大きな問題点として上記にも示した通り直接的抜き出しによる学習支援の実践はほとんど無く、今後抜き出しを行うにあたっては支援のノウハウ、教材研究や人的リソースの不足をどう解消していくかなどの課題に対して経験的蓄積が足りないままに終わってしまったということが出来る。この事例は「インクルーシブか抜き出しか」という教育のジレンマの狭間での出来事でもあり、これを考えさせられる好例であった。当然ながら実践の中では我々の思惑通りに事が運ばない難しさや個々の生徒の特性に大きく依存するところがあり一概にどれがベストな選択とは言えないとつくづく感じさせられた。しかし今後も抜き出しによる学習支援は必ず必要になると考えられるため、実践と経験や教材などの蓄積が待たれる。

## (3) 次年度に向けた準備状況

今年度の反省を受け、特に学習支援体制に関しては空き時間教員を時間割で組み込むのではなく常駐の専属教員を配置し、常時対応可能な体制と学習支援室の環境や課題の充実を図る計画である。

また、特別支援教育コーディネーターを校務として明確に位置づけることにより、学校内の教職員全体の特別支援教育に対する理解のもと学校内の協力体制を構築する。特に発達障害生徒の学習支援計画や個別の支援計画などの作成を行う予定である。

さらにスクールソーシャルワーカー2名を専属で配置し、担任、特別支援教育コーディネーター、従来から本校で採用している常駐のスクールカウンセラーと協力し外部機関との連携も強固に深めていく予定である。